

聞名仁教

第 179 号 毎月発行
(発行日) 2025 年 8 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
<http://nenbutsuji.info/>
アドレス nenbutsuji6@gmail.com
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)
記号 17810 番号 7259431

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

治らぬ病氣

佐々木蓮磨

人間の生活を脅かすものはいろいろありますが、その中でも病氣が最も一般的で、また深刻なものではないでしょうか。この人間の弱点から、またいろいろな不幸を引き起こす場合が少なくありません。

世間で迷信と呼ばれるものの多くは必ず病氣に関連しています。そして、それがやがては一つの宗教とな

って、多くの民衆を迷わすことになるのは昔も今も変わりはありません。今日は科学時代と言われておりますが、迷信が依然として根を絶たず横行している事実は、科学万能を謳歌^{おうか}している現代としては奇現象と見えないこともありませんが、実は科学万能の考えが、一つの大きな迷信ではないかと思えます。

一体、科学なるものは、最も確実な方法で宇宙の現

象を究明する学問と言ってもよろしいでしょう。そうになると科学の進歩は、外界の究明から一転して人間能力の限界に当面し、ここに神秘の力を信ずることになるのは、むしろ当然の道ではないかと思えます。しかし、いかに神秘の力に頼っても、自分勝手な欲望を満た^はそうと謀^はることは極めて非科学的であります。

病氣についても、医療で治らぬものを神仏の力で治してもらおうとすることは、非科学的な人間の勝手な考え方です。もちろん神仏の力を信じて心に安住を得ることが肉体に影響して健康が保たれるとか、「必ず治る」という強い信念が肉体に働いて、治りが早いとかいうことは科学的に証明されることでしょう。しかし、信仰の力で、どんな難病でも治ると考えることは甚だし

い迷信と言わねばなりません。

病氣について最も科学的な考え方は、まず第一に治らぬ病氣というものを究明しておくことです。人間として一生涯に幾度くらい病氣をするのでしょうか、これは人によって異なるものですが、仮に一力年に二回病氣するとすれば、五十年生きるとして百回病氣するわけです。しかし、そのうち九十九回は必ず治るものです。医者にかかっても、かからなくても、薬を飲んでも飲まなくても、宗教に入っても入らなくても、祈禱してもしなくても、間違いなく治ります。しかし、最後の一回だけは、如何にしても治りません。これは間違いのない科学的事実であります。

世間では、近親が医者にかかっても治らずに死んだような場合、または薬を飲

んでも治らなかつたような場合、すぐに「あの医者は駄目だ」とか、「あの薬はきかぬ」とか言いやすいのですが、これも非科学的な見方であります。またいかなる妙薬だと言っても、必ず一度はきかぬときがあるわけです。これも間違いない事実であって、この点を明確に確認して、その「どうしても治らない」という厳^{げん}粛^{しゆく}な事実に対して、如何に対処するか?ということを究明することが、人間として人生に対する最も大切な科学的態度ではないかと思えます。

正しい宗教というものは、人間能力の限界に対して、如何に対処するか、ということを明確に認知せしめる道ではないでしょうか。そう考えてきますと、宗教と科学というものは決して相反するものではなく、むしろ正しい宗教こそは最も人生を科学的に見て行く道であると思えます。

(了)

清沢満之先生に学ぶ

5

清沢満之の言葉に、

「宇宙万有の千変万化は、

皆これ一大不可思議の妙用に属す。しかして吾人は之を当然通常の現象として、毫も之を尊崇敬拝するの念を生ずることなし。吾人にして智なく感なくば則ち止む。いやしくも智と感とを具備する靈物にして、この如きは蓋し迷倒ならずとするを得んや。一色の映ずるも一香の薫ずるも決して色香そのものの原起力に因るにあらず。皆悉く彼の一大不可思議力の発動に基くものならずばあらず。色香のみならず、吾人そのものは如何。その従来するや、その趣向するや、一も吾人の自ら意欲して左右し得る所のものにあらず。ただ生前死後の意の如くならざるのみならず、現前一念の心の起滅、また自在なるものにあらず、吾人は絶対的に他力の掌中

にあるものなり」(『清沢満之先生のことば』永田文昌堂、二〇二三年、四二〜四三頁)とあります。

浄土真宗の教義でアミダ仏とはどういう仏様ですかと問われる場合、基本的には光明無量・寿命無量の仏様ですと答えられてきました。そして光明無量は一切の衆生を救済すべく限りなくはたらいていて、親鸞聖人は浄土真宗の教法をアミダ仏の光明のはたらきを本に体系的に説かれました。

ですので親鸞聖人のことを「光の思想家」と呼ぶ人もいます。そこで近世まで真宗はアミダ仏の光明のはたらきを専ら説いてきました。

そういう中で明治時代に真宗大谷派に清沢満之先生が現れ、先生はヨーロッパの思想に触れ、人間の自己存在そのものを問うていくなかで、自己存在の根拠としてアミダ仏を見いだしま

した。自己存在を成り立たしめているのはアミダ仏の寿命無量のはたらきであることに目覚めました。そしてアミダ仏のはかりなきいのちのはたらきを清沢先生は「絶対無限の妙用」と表わされたり、ここでは、宇宙万有の千変万化は「不可思議の妙用」と表しました。そういう背景の上でこの言葉の意味をいただいていこうと思います。

「宇宙万有の千変万化は、皆これ一大不可思議の妙用に属す。しかして吾人は之を当然通常の現象として、毫も之を尊崇敬拝するの念を生ずることなし。吾人にして智なく感なくば則ち止む。いやしくも智と感とを具備する靈物にして、この如きは蓋し迷倒ならずとするを得んや。」

宇宙の天体活動はもとより、地球の様々な動物・植

物、山河大地などの万物の姿はまったく不思議としか言いようはありません。日頃、忙しさの中、あれこれの思いで頭が一杯になり、目の前の自然のいのちの活動をありのままを見ないのが普通です。けれども落ちて生きている物の姿や動きなどを見ると本当に不思議です。こうした不思議ないのちのはたらきに囲まれておりながら、私たちは経済とか仕事とか健康とか人との付き合いとか子育てに追われて、現実そのものの不可思議さの中にいることを忘れていきます。

自分の身体の心臓や胃腸など、一つ一つの機能も不思議の塊とっていいのでしよう。月を見る、月の光が眼に届いて眼球を通して網膜に結ばれ、それが電気信号のようになって脳の視覚野に至ると夜空に美しい月として認識される。あるいはバイオリンの演奏を聴くと空気振動が耳に届いて、これも神経細胞を通して電気信号のようになって脳の

聴覚野に届くと、えもいえぬ美しい響きとして感じられる。どうしてなのか、分からない。まことに不思議としか言いようはない。こうした不思議に心打たれるとき、「尊崇敬拝の念」がおのずから生じる。しかるにこうした不思議だらけのはたらきの中にいながら、周りの諸物や諸現象を「当然通常の現象」としか思わないのは、ものの真相を見る智慧もなければ、純なる感性もないとしかいえません。けれども人間は本来、こうした智慧や感性をもともと持っている「靈物」にもかかわらず、こうしたいのちのはたらきを当たり前のこととしてしか感じないのは、まことに「迷倒」というほかはない、と清沢先生はいわれるのです。

「一色の映ずるも一香の薫ずるも決して色香そのものの原起力に因るにあらず。皆悉く彼の一大不可思議力の発動に基くものならずばあらず。色香のみならず、吾人そのものは如何。その

從來するや、その趣向するや、一も吾人の自ら意欲して左右し得る所のものにあらざ」といわれています。様々な花の色、またさまざまな花の香りなど、皆はかりないのちの不思議な活動の表れです。

そして「その從來するや、その趣向するや、一も吾人の自ら意欲して左右し得る所のものにあらざ」といわれています。「從來」とは行きて来ること、「趣向」とは何かに向かっていくことです。

ただ、ここは少し説明がいてるところです。私たちがその都度どう行動するかは、その人自身の自由に任されているので、何を為しどう行動するかまでもすべて決定されているということではなく、いつでも今ここでその都度どう判断し、どう行かうかという「自由」は私たちが造ったものでもなく選んだものでもありません。すでにいのちのはたらきによつて決定されたものであつて、「吾人の自ら意欲して左右し得る所のもの」では

ありません。そのつど自由であるべく、無量の寿命のはたらきによつて決められており、その自由において善く生きることが私たちの勤めであり求められているのであります。

そして最後に「ただ生前死後の意の如くならざるのみならず、現前一念の心の起滅、また自在なるものにあらず、吾人は絶対的に他力の掌中にあるもの也」とあります。生前、いわば生まれる前の私に対して、あるいは死後私はどうなるかに対して、私には「自在なるものにあらず」で、自由にどうこうすることはできません。

そればかりか、「現前一念の心の起滅も自在なるものにあらず」です。ここは非常に大事なところですが。心は一瞬一瞬動きどうしです。この心の起こるのを止めることもできねば、心が滅するのもしめることはできません。一瞬一瞬心が生まれては消え、消えては生まれる、このもつとも身近な現

実である心の起滅に対して、これを自分の力、自分の理性や意思でどうにかできるものではないと思います。ひと思いが生まれては消え、消えては生まれることは、まったく我ならざる力いわば「他力」と言わざるを得ません。

心そのものの生起と消滅の連続は我ならざるはかりなきいのちのはたらきによつて起こるのです。ですから身体も心のはたらきも、私全体が「吾人は絶対的に他力の掌中にあるものなり」なのです。

こうした宇宙の広大な動きから、心のひと思いまでも我ならざるはたらきで、このはたらきを離れて自己存在は一瞬も成り立ちません。このはたらきを寿命無量のはたらきであると清沢先生はいわれるのです。寿命無量のアミダ仏を離れて私の全存在は成り立ちません。そういう真実を親鸞聖人は「撰取不捨の真理」と押さえられているといえましょう。

明治時代に清沢満之先生の教えが人々に感銘を与え、一時は「清沢教」といわれるほど多くの人に喜ばれたのです。

そういう人たちの中で、しばしば「一切は如来のなさしめである」といわれました。この意味は全ては我ならざる如来のはたらきとすることですから、天体の運行も生物の姿も植物の姿も人間の身体も、我々人間の意思や行動をこえた大自然（はかりなきいのち）の不可思議なはたらきであるといわれるのです。

しかしながら人間が「どう感じ、何を意思し、どのようにに行動するか」までも「如来のはからいである」とはすぐにはいえないのです。私の心のはたらきや身体が成立する根拠は如来の無量ないのちのはたらきによつてですが、「私がどう感じ、どう思い、どう行動するか」までも如来の計らいであるとはすぐにはいえません。

たしかに如来の大悲の心が私の心に浸透し、私の心

を促して、アミダ仏の大悲のお心に促されて、人に親切をするようなことがありましよう。それは如来の御もよおし、あるいは如来のお心が私を動かしているという点から言うくと、「如来のなさしめによつて行つた」といえましよう。ですので、

歴史上には神や仏の愛に深く浴した無我な人が「もはや私が生きているのではないキリストが私において生きている」とか「私は仏の操り人形です」とかいわれるのは、こうした如来の促しによつて、自我のはからいをまじえずに言つたり行つたりできる聖者の場合であります。

しかし、一般の凡夫はたとえ如来の促しがあつても、それに気づかず、むしろそれに逆らつて自我中心の思いや意欲にしたがつて言つたり行つたりしています。そういう場合は「如来のなさしめである」とは言えません。「盗みをするのも、嘘をつくのも如来のなさしめだ」などとは言えません。それは自我の恣意的な思い

を中心に行っているにすぎません。

ですから如来の「なきしめ」というような言葉は自我を超えたことがらに於いては言えても、自分の行いについて、そのままそのようにいうことは誤解されやすいです。

「盗みをしたり暴力を人にふるったり」することは、

人に与えられた自由によって為すのであって如来のなさしめではありませんが、如来のいのちのはたらきの中で起こっているできごとでもあります。如来のいのちのはたらきがなくては人は一瞬も存在し得ませんから。如来によって「生かされていく」という事実の上で「どう思い、どう考え、どう行うか」という自由があるのです。そこに自由が与えられているのです。人に自由があるということは一瞬一瞬、自分の考えや行動の善し悪し、ものごとの認識の精粗が問われているのです。問われているということは行為の責任が私自身にあるということです。

心のはたらきそのものは寿命無量のはたらきであつても、心が「何を思い、何を考え、何を選ぶか」はそこに一人ひとりの自由があるのです。そういう定めの中に在るのです。そういう定めの中で、何を考え何を思うかは一人ひとりの責任であり、一人ひとりに問われていることなのです。

自我しか知らず、如来に生かされていることを見失い、アミダ仏の促しを感じず、自分の欲求を中心に生きてきた人が、アミダ仏のはたらきである南無阿弥陀仏を称え、ナムアミダ仏を聞く。今この私を全面的に掴んでいるアミダ仏の名のりが南無阿弥陀仏であり、「汝を抱いている、汝ともにいる」というお声を南無阿弥陀仏において聞かせていただく。それによってアミダ仏が私と共にましますと知らされ、阿弥陀仏の願いの促しに少しなりともそつて生きようという姿勢が生まれてくるのです。

(了)

【住職雑感】

尋常でない暑い日が続く。

摂氏三五度以上になり、四〇度近くなる気配である。

こういう暑さは三十才の頃、インド・ビハール州にある釈尊のお覚りの場所であるブッダガヤでの生活で体験したものである。ブッダガヤは全仏教における第一の聖地として今や世界中から巡礼者が大挙してお参りに来ている。ただ私が居た五十年前は静かでお参りの人は少なかった。私は当時、日本寺に駐在僧として短期間居たがインドの四月から六月は灼熱の日々が続き、宿舍の部屋にはもちろんクーラーなど無く、ガラス窓から熱が入らないようにうに毛布を張ったり、部屋に水をまいたり、余りに暑いときは外に出てテントの中で寝た。やや涼しい時間は朝の六時前後の一時間だけであった。四〇度に上る気温の連続で、外で寝ると、今度は熱風が顔に当たって痛い。こんな中、不思議にもマンゴーの木だけは美味しい実をたくさんつける。

インドではやはりマンゴーは果物の王様と言われ、格別に美味しかった。まだ日本にはほとんど普及していなかったもので、余計にそう感じたのかも知れない。極暑の日々がようやく下火になると、今度はスコールが降る。そうすると、土中にいた毒へびやサソリが地上に出てくるので、ブッダガ

ヤの大塔の周りを毎晩念仏して回っていた私に、親しくしていたスリランカ僧のパンニヤラーマ師から、蛇にかまれる恐れがあるから外を歩かない方がいいとの忠告を受けた。それ以後は大塔の中の仏陀の前で専ら念仏したのであった。暑い時期になると、インドに居た頃を懐かしく思い出す。

《二〇二四年度東本願寺基金御懇志報告》

懇志者名（敬称略）

青木宏克 赤股弘子 秋常芳子 浅野真由美 石川紀美子 伊東清文 稲田富恵 井上守 岩谷龍 岩田能一 植田節美 宇田聡 改発正浩 加藤忠 萱島聖志 菊池クニエ 喜多真澄 窪ナル子 児玉慶子 佐藤孝幸 白石千鶴子 関宥江 高田幸子 高田公子 谷村往世 土居令子 長井一江 中川政二 中村洋子 中村穂積 中村美登子 中村匡子 中村幹夫 野原佳子 泰京子 原崎佳水 平田幸子 三浦一浩 宮野妙美 宮野まり 室塚良治 山下美重子 山田節子 山下東洋栄 吉岡正人 吉田徳子 吉ノ蘭睦枝 中村泰司 中村真吾 小畑住子 香川郁夫 寿賀晴剛 中野タカ子 濱秀子 山下絹子 剣持政之 山科瞳
合計（総額）一九六〇〇〇円

以上の皆様方より御懇志を賜りました。大谷派（東）本願寺の方に納めさせて戴きます。有難うございました。 合掌

《盂蘭盆会法要》

八月十日（日）午後二時始

法話 念佛寺住職

* * * *

*法要の際、法名をご持参下されば仏前に安置させていただきます。